

令和5年度
舞台芸術等総合支援事業
(劇場・音楽堂等機能強化総合支援)

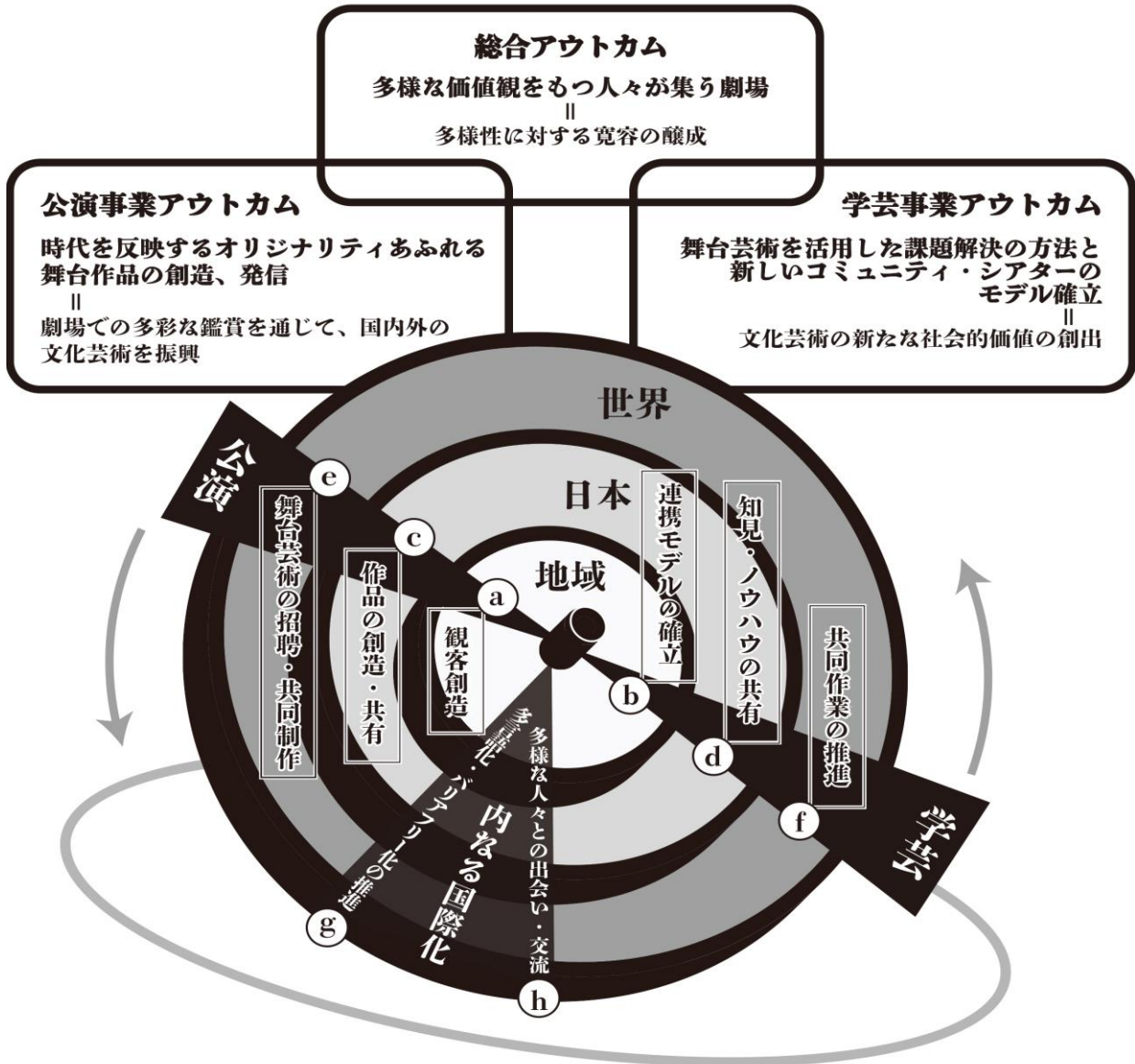
自己点検報告書

団 体 名	公益財団法人せたがや文化財団
施 設 名	世田谷文化生活情報センター（世田谷パブリックシアター）
助 成 対 象 活 動 名	共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト
助 成 期 間	5 (年間)
内 定 額	49,440 (千円)

1. 事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）



(2) 令和5年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数(人)	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	白井晃演出作品 『ある馬の物語』	2023年6月21日～ 7月9日	原作：レフ・トルストイ 上演台本・演出：白井晃 出演：成河、別所哲也、小西遼生、 音月桂 他	目標値	9,054
		世田谷パブリック シアター		実績値	7,559
2	インバル・ピント 『リビングルーム』	2023年5月19日～ 5月21日	振付・衣裳デザイン・舞台美術：イ ンバル・ピント 出演：モラン・ミュラー、イタマー ル・セルツシ	目標値	1,000
		世田谷パブリック シアター		実績値	1,522
3	せたがやこどもプロジェ クト『せたがや 夏いち らくご』	2023年7月17日	プロデュース：春風亭一之輔 出演：春風亭一之輔、桂小すみ、米 粒写経	目標値	1,000
		世田谷パブリック シアター		実績値	1,206
4	せたがやこどもプロジェ クトラルンベ・ダンサ 『エアー～不思議な空の 旅～』	2023年7月28日～ 7月30日	構想・演出・振付：ダニエラ・メル ロ、ファン・デ・トレス 出演：ラルンベ・ダンサ	目標値	520
		シアタートラム		実績値	553
5	アートタウン海外招聘公 演『フィアース5』		※総合支援事業助成対象外	目標値	960
				実績値	
6	前川知大演出作品 『無駄な抵抗』	2023年11月7日～ 11月23日	作・演出：前川知大 出演：池谷のぶえ、渡邊圭祐、安井 順平、浜田信也、穂志もえか、清水 葉月、盛隆二、森下創、大窪人衛、 松雪泰子	目標値	7,425
		世田谷パブリック シアター		実績値	7,804
7	横山拓也作・瀬戸山美咲演 出作品『う蝕』	2024年2月10日～ 3月3日	作：横山拓也 演出：瀬戸山美咲 出演：坂東龍汰、近藤公園、綱 啓永、 正名僕蔵、新納慎也、相島一之	目標値	4,050
		シアタートラム		実績値	6,467
8	海外招聘ダンス公演 Ate9	2024年3月1日～ 3月3日	振付・演出：ダニエル・アガミ 出演：カンパニーAte9	目標値	840
		世田谷パブリック シアター		実績値	1,045
9	シアタートラム・ネクスト ジェネレーション『Pupa』	2023年12月7日～ 12月10日	振付・演出：女屋理音 出演：女屋理音、Aokid、島中真濃、 青柳潤 ほか	目標値	450
		シアタートラム		実績値	480
10	SPT ラボ レクチャーシリーズ	2023年4月～2024年 2月	講師・進行役：荒井洋文、久保田翠、 蔭山ヅル・スズキクリ、すずきこー た、とみやまあゆみ ほか	目標値	200
		世田谷パブリック シアター稽古場 他		実績値	308
11	Technical Theatre Training Program 2023 舞台技術講座	2023年8月24日～ 8月26日、 2024年2月23日	舞台音響入門講座、舞台照明入門講 座、舞台技術安全基礎講座、安全セ ミナー 講師：劇場技術部スタッフ 他	目標値	250
		世田谷パブリック シアター		実績値	239

12	フリーステージ	2023年4月29日、 4月30日、5月5日～ 5月7日	出演：世田谷区民を中心とした、音楽教室、ダンス教室、サークル、任意団体など	目標値	2,000
		世田谷パブリックシアター、シアタートラム		実績値	2,377
13	移動劇場「@ホーム公演」	2023年6月10日～ 6月23日	脚本・演出：ノゾエ征爾 ダンス振付：AYANA 出演：山本光洋、たにぐちいくこ、井内ミワク、ノゾエ征爾	目標値	600
		世田谷区内福祉施設		実績値	520
14	世田谷アートタウン 三茶 de 大道芸	2023年10月21日、 10月22日	プロデューサー：橋本隆雄 参加者：国内で活動しているパフォーマー、公募ウォーキングアクト、ボランティアスタッフ等	目標値	200,000
		三軒茶屋キャロットタワー、近隣商店街		実績値	177,000
15	子どものためのワークショップ「せたがやこどもプロジェクト 夏休みワークショップ」	2023年7月24日～ 8月30日	進行役：富永圭一、大道朋奈、田崎葵、青山公美嘉、有吉宣人、すずきこーた、とみやまあゆみ、柏木陽、FUNI	目標値	300
		世田谷パブリックシアター稽古場		実績値	202
16	学校のためのワークショップ「かなりゴキゲンなワークショップ巡回団」	通年	進行役：すずきこーた、富永圭一、柏木陽、とみやまあゆみ、青山公美嘉、田崎葵、大道朋奈	目標値	5,100
		世田谷区内小中学校		実績値	6,175
17	地域連携プログラム「極楽フェス」	2023年7月8日	出演：大道朋奈、有吉宣人、大塚由紀子、高野菜、中川陽子、大道朋奈、戈文来、松田文、山本雅幸 進行：金川晋吾、阿部健一、花崎攝、青木拓磨、柏木陽、笠村勇樹	目標値	200
		世田谷ボランティアセンター 他		実績値	400
18	学芸事業出版	通年	活動報告冊子『キャロマガ vol.20』 発行部数：2,000部	目標値	—
		—		実績値	—

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>事業計画に必要な構成要素が有機的に連関し、当初の予定通りに事業が進められているか。</p> <p>5月に新型コロナウイルスの感染症法上の分類が5類に移行したことにともない、「地域」「日本」「世界」のそれぞれの位相でコロナによって失われた繋がりを再構築し、本格的にポストコロナ時代に向けた取り組みを開始した。「計画工程表」における3年目の計画の達成状況は以下のとおりである。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 「地域」→「公演」:「友の会」は劇場のコアサポーターと位置づけているが、設立以来四半世紀を経て現状に合わなくなっていると思われる部分について検証をおこなった。これまで毎月発行していた機関誌を隔月発行として印刷費等を圧縮する一方、メールマガジンを補填的に活用することによって従来よりも迅速な情報提供をおこなう工夫をおこなうなど、改革を開始している。2. 「地域」→「学芸」:地域連携芸術サポートセンター機能の深化を目指し、「地域連携プログラム『極楽フェス』」(17。以下カッコ内は事業番号)をより地域に開く形で開催した。従来から参加していた福祉・医療関係団体に保育園、区立図書館が加わり、地域の多様なアクターが協働した。また、コロナ禍で他者と触れ合う機会が激減していた子供たちを対象とした演劇ワークショップ(15、16)、高齢者や障害者を対象とした出張公演(13)を積極的に展開した。3. 「日本」→「公演」:芸術監督演出による音楽劇(1)、勢いのある落語家による寄席企画(3)、実力派の劇作家・演出家による創作(6)、日本演劇の未来を背負う劇作家と演出家の初顔合わせ(7)と当劇場ならではの企画で上演をおこなった。演劇作品(1、6、7)はすべて国内ツアーを実施し、成果を共有した。4. 「日本」→「学芸」:全国的に大きな 이슈となっている部活動の地域移行を視野に入れた取り組みを特集した冊子を作成し、劇場ホームページからPDF形式でも無料配布をおこなって、事業実施を通じて得られた知見やノウハウを広く共有した。5. 「世界」→「公演」:コロナ禍で一時中断していた海外招聘を本格的に再開し、世界最先端のコンテンポラリーダンス(2、8)を紹介する一方、子供向けの作品(4)を夏休み時期に上演し、多彩に展開した。6. 「世界」→「学芸」:コロナ禍で事業を中止せざるを得なかったコミュニティシアター分野での交流事業再開の可能性を探る一方で、地域と連携して実施するフェスティバル(14)における国際交流事業を検討した。いずれも実現には至っていないが、来年度以降の実施に向けた地ならしが進んでいる。7. 「内なる国際化」→「公演」:劇場ホームページのリニューアルに合わせ、機械翻訳による英語での情報発信を開始した。非日本語話者に対する情報提供のスピードを大幅に改善することが可能となった。8. 「内なる国際化」→「学芸」:コロナ禍で停滞していたが、地域と連携したフェスティバル(14)に劇場近隣の大学に通う留学生の参加を得ることができ、活性化への素地ができつつある。
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>「創造性」の項目で詳述するとおり、公演事業は各種劇評で高い評価を得ることができ、複数の演劇賞を受賞した。また、すべての主催公演事業でハラスメント講習を実施する先駆的な取り組みは大きな注目を集め、各種メディアでも大きく取り上げられた。</p> <p>学芸事業においては、演劇を通じてコミュニケーション能力を磨く重要性が注目され、その意義を強調する報道もあった。また、下馬地区における地域連携プログラム(17)はますます広がりを見せており、それを契機として他地域の社会福祉法人との連携が始まるなど、多様な展開が見られている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成し、アウトカムの発現は可能か。

各項目の目標の達成状況は以下のとおりとなった。

1-1. 「地域」公演

目標 新規ユーザーの獲得。世田谷区民、若年層の顧客開拓。地域の人々による発表の場の提供。

指標 せたがやアーツカードチケット販売年間 2,500 枚以上、U24 年間 500 人以上入会。世田谷パブリックシアター友の会会員数 3,500 人の水準を維持。地域団体参加型の事業で 100 件以上の申込。地域協働型フェスティバルで 20 万人の来場者。ヒアリング調査による地域の身近な劇場としての評価エビデンスの収集。

実績 せたがやアーツカードチケット販売年間 2,735 枚（達成）、U24 年間 460 人入会（未達成 達成率 92.0%）、友の会会員数 3,451 人（未達成 達成率 98.6%）、地域団体参加型事業（9）申込 90 件（未達成 達成率 90.0%）、地域協働型フェスティバル（10）で 177,000 万人の来場者（未達成 達成率 88.5%）、評価エビデンスの収集未実施（未達成 実施方法検討中）

1-2. 「地域」学芸

目標 舞台芸術を用いた地域連携モデルの確立。教育、福祉、まちづくりなど様々な領域に、文化芸術の創造性を生かしたプログラムの開発。

指標 ワークショップ・レクチャーの年間実施事業数 40 件、延べ日数 200 日、参加者 4,000 人以上。年 2 件以上の地域課題解決のための事業実施。ヒアリング調査による地域連携事業への評価エビデンスの収集。参加者に占める高齢者の割合 8%以上。特に高齢男性の割合 4%以上。

実績 ワークショップ・レクチャー年間実施事業数 51 件 407 回、延べ日数 382 日、参加者 10,607 人（達成）、地域の課題解決のための事業 3 件（うち補助対象事業 17）（達成）、評価エビデンスの収集未実施（未達成 実施方法検討中）、高齢者の割合 20.5%、高齢男性 7.6%（達成）

2-1. 「日本」公演

目標 高水準の作品の創造及び国内ツアーの実施による成果の共有。

指標 大型主催事業として、年 4~5 作品の上演をおこない、これらの平均入場者率 85%を目指す。また、1~2 作品は国内ツアーを実施する。インターンの受け入れ人数 20 名。メールマガジン年間 12 万人への送信。Twitter（現 X）のフォロワー数 23,000 人。アンケート調査での年間ラインナップへの積極的な満足層を 40%以上。

実績 大型主催事業 8 件（内 補助対象事業 1, 2, 3, 6, 8）（達成）、補助対象事業の平均入場者率 121.7%（達成）、国内ツアー 7 作品（内 補助対象事業 1, 2, 4, 6, 7）（達成）、インターン 8 人（未達成 達成率 40.0%）、メールマガジン年間 148,090 人送信（達成）、Twitter（現 X）フォロワー数（6 月 24 日時点）30,030 人（達成）、公演来場者へのアンケート調査での「世田谷パブリックシアターが実施している公演、ワークショップなどの年間プログラムをどのように感じますか？」に対する「とても魅力的である」「魅力的である」の回答が平均 83.2%（達成）

2-2. 「日本」学芸

目標 プロジェクトによって得られた知見、ノウハウの共有。

指標 知見・ノウハウを年 1 回以上、出版物またはオンラインで共有。新規に教科「日本語」ワークショップを実施する学校を年 1 校以上開拓。

実績 出版物『キャロマガ』（18）年 1 回発行（達成）、学校新規開拓 2 校（達成）

3-1. 「世界」公演

目標 先鋭的な海外舞台芸術の招へい、国際共同制作の推進、多様な価値観を反映した海外戯曲の翻訳上演

指標 海外招聘公演、国際共同制作作品または海外戯曲の翻訳上演作品を年1~2作品上演。平均入場者率60%。

実績 海外招聘公演、海外戯曲の翻訳上演7作品（内補助対象事業1,2,8）（達成）、補助対象事業の平均入場者率120.0%（達成）

3-2. 「世界」学芸

目標 コミュニティ・シアターの分野での国際共同作業の推進

指標 コミュニティ・シアターの分野での海外との共同作業を5年の間に2件以上実施。

実績 海外との共同作業未実施（未達成 コロナ禍の影響が続く中、コミュニティレベルでの交流は極めて難しくなっていることから、異なるアプローチによってアウトカムの発現を目指すことも検討していく。）

4-1. 「内なる国際化」公演

目標 多言語化・バリアフリー化の推進

指標 多言語字幕（聴覚障害者用日本語字幕を含む）付き公演、手話通訳付き公演、舞台説明会付き公演を年4~5回実施する。字幕タブレットを準備するなど、サービス利用者数をあらかじめ設定する公演においては、利用率70%以上を目指す。

実績 字幕タブレットありおよび手話通訳士待機公演2回、舞台説明会付き公演3回（達成）、あらかじめ定員を設定するサービスは行わなかった。

4-2. 「内なる国際化」学芸

目標 性別、年齢、国籍、障害の有無にかかわらず、多様な人々が劇場で出会い、交流する機会を提供。特に在住外国人との連携

指標 在住外国人が参加する普及啓発・人材育成事業を年5回以上実施する。

実績 在住外国人を対象とした事業未実施（未達成 財団内他部署との連携による実施を検討中）

公演事業（事業番号1-9）については、3-1、4-1の各カテゴリーにおいて目標を達成するとともに、2-1についてもほぼ目標を達成した。唯一未達成となったインターンの受け入れについては、コロナ禍の中で人数を絞って実施する中で、少人数で実施することのメリットが参加者アンケート等から明らかとなったことから、その方向性を継続しているものである。1-1については、複数の指標で目標未達成となったが、達成率が90%以下となった地域団体参加型事業（9）はコロナ禍の中で新規募集を取りやめていたものを4年ぶりに再開したものであり、地域協働型フェスティバル（10）も4年ぶりにほぼコロナ前の状態に戻しての再開となっている。いずれも長期間の空白があった中で健闘したものと評価している。「時代を反映するオリジナリティあふれる舞台作品の創造、発信」という「公演事業アウトカム」については相当程度の発現を見たと思われる。

学芸事業（10-18）については、2-2で目標を完全に達成し、1-2でほぼ目標を達成した。引き続き、「地域」と「日本」という身近な場所での活動は十分な成果をあげており、「舞台芸術を活用した課題解決の方法と新しいコミュニティ・シアターのモデル確立」という「学芸事業アウトカム」については、確実に発現が見られていると思われる。他方、3-2と4-2のカテゴリーにおいては、目標が未達成となった。「世界」については、地域協働型フェスティバル（10）に海外からの参加者を招聘し、地域との交流につなげることを計画したが、急激な円高と輸送費の高騰により、実施を断念せざるを得なかった。「内なる国際化」については、せたがや文化財団国際事業部との連携の調整に時間を要しているが、同事業部が運営している在住外国人向け日本語教室と連携しての事業実施の可能性など、具体的な検討を行っている。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

すべての事業において、ほぼ計画通りの期間で事業を実施した。当劇場においては、平成29年12月に策定した「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」に基づき、補助金の対象事業となる主催公演を始め、提携・貸館公演の事業スケジュールを決定している。「基本方針」は令和5年度に点検・見直しを実施したが、それぞれの公演形態について年間使用日数の比率の基準を設定し、それに基づいてスケジュールを決める形を継続することとなった。この方法により、プログラムのバランスと一貫性を担保するとともに、事業の多様性を確保することが可能となっている。さらに、職員の業務負担を適切に分散し、過大な勤務を防止する効果も現れている。

入場者数の目標も、上記の方法で導き出された事業実施期間に基づいて設定しているが、有料公演事業(1～4, 6～9)の入場者率は平均119.8%と想定を上回った。これは昨年度(118.2%)をやや上回るものであり、特に年度後半の事業は予想を大きく上回る入場者を得ることができた。6～7月に実施した公演事業(1)のみ想定を下回ったが、これは「第9波」とされた同時期の新型コロナウイルスの感染急拡大も大きな理由であると思われる。

学芸事業(10～18)についても、ほぼ計画通りの期間で事業を実施した。一般の参加者と協働するという性質上、新型コロナウイルス感染の影響を非常に大きく受けてきたが、フリーステージ(12)の入場者率が令和4年度の75.5%から118.8%に大幅に改善したことに端的に現れている通り、年度当初の想定に従って事業を運営することがようやく可能となってきたと言える。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

新型コロナウイルスの感染症法上の分類が変更となったが、公演事業においては、スタッフ・キャストの感染によって公演が中止される事例が引き続き数多く見られたことから、徹底した感染症対策を継続した。キャスト・スタッフ全員を対象としたPCR検査を定期的実施してクラスターの発生を未然に防ぐ取り組みをおこなうとともに、公演の規模や特質を考慮してアンダースタディ(スウィング)を適切に配置する取り組みも継続し、万一体調不良者が出た場合でも事業を継続する可能性を最大限に高める努力をおこなった。いずれの対策も費用や手間の面で大きな負担となるものであり、結果的に事業費を大きく押し上げることとなっているが、事業の中止を防ぎ、事業の成果を観客に届けることを最優先に考え、劇場一丸となって対応をおこなった。結果的に、コロナ禍の期間を通じて公演の中止が一度も発生することがなかったことは、劇場スタッフ全員の創意工夫とたゆまぬ努力の結果であると考えている。

また、昨年度から引き続いた諸物価の高騰や人件費の高騰への対応も大きな課題となっている。さらに、年度後半は急激な円安の進行により、予算策定時の想定レートに比べて実際の支出時のレートが3割以上円安となった事例もあり、本年度特に力を入れて企画した海外招聘公演(2, 4, 8)が大きな影響を受けた。そのような中で、事業の効率的な実施による経費の圧縮や広報の充実による券売促進を含む地道な努力を積み重ね、補助金も活用して補助対象事業の入場料金をほぼ計画通りの廉価に抑えることができた。

学芸事業においては、夏休みワークショップ(15)を始めとする事業の参加者から密な状態が発生することへの不安が示されることもあったことから、1回あたりの参加者数を絞り、回数を増やすといった対応を継続した。進行役の謝金等、1回あたりの経費は参加者の増減によって大きく変わるわけではなく、事業費全体を圧迫している。参加者が安心できる環境整備と旺盛な需要への対応を限られたリソースの中で両立するため、引き続き難しい対応を迫られることとなった。

(4) 創造性

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性に優れている（と認められる）か。

白井晃が芸術監督に就任して2年目を迎え、「共に生きる場としての劇場：多様性を巻き込む同心円プロジェクト」にも新芸術監督のイニシアチブがさらに反映された形で事業を展開した。

創造の現場におけるハラスメントの根絶は、白井が最も力を入れている取り組みの一つである。「共に生きる場としての劇場」を実現するための最も基本的な条件は、そこに集う人全員に心理的安全性を担保することであるとの認識から、すべての主催公演事業においてハラスメント講習を実施する取り組みをいち早く開始した。講習に参加した俳優が、インタビューで「最近面白かった経験として、ハラスメント研修に出たことがあります。・・・世田谷パブリックシアターでは、舞台に関わる全員を対象としたハラスメント研修が行われているんです。これは、職業に関わらず多くの方が受けたほうが良いですよ！」（「川平慈英インタビュー」『B-Plus』2023年7月5日）と特に言及するなど、各種メディアでも大きく取り上げられた。

また、令和4年度に白井芸術監督就任記念イベントとして実施した、近隣の公共劇場の芸術監督（小川絵梨子氏、近藤良平氏、長塚圭史氏）との公開トークは、その後各館持ち回りでの開催に発展し、本年7月の新国立劇場での回で一旦完結した。「公共劇場とは何か、何をすべきか」を問い直そうという白井のイニシアチブが継続的にインパクトを与え、劇場間のネットワークがさらに強固となった事例と言える。これを取り上げた記事では「やはり『地域に開かれた劇場づくり』を目指して努力しているのは民間よりも公共劇場である。したがって、舞台芸術なるものに触れたいとか、子どもに触れさせてみたいと思った時は、まず最寄りの公共劇場について情報をチェックしてみるのがおすすめだ」（『日経MJ』2023年8月11日）との指摘があるなど、公共劇場という存在そのものに対するポジティブな見方につながっている。

さらに、白井自身が演出した作品において、劇場を地域に開いていく先導的な試みをおこなったことも特筆される。『ある馬の物語』(1)において、世田谷区内にキャンパスがある多摩美術大学美術学部演劇舞踊デザイン学科と連携し、学部1年生の必修授業の一環として観劇いただくとともに、演習を手掛けた白井と劇場スタッフが2回にわたって特別講義を実施し、劇場事業を大学における専門家育成に結びつける機会とした。また、夏休み時期に文化庁「劇場・音楽堂等における子供舞台芸術鑑賞体験支援事業」として上演した白井の演出作品『メルセデス・アイス』においては、子供たちが劇場と演劇に親しめる仕掛けを多数用意した。劇評でも「終演後、舞台の客席寄りに小道具や装置を置いてくれて、至近距離から舞台装置の詳細を確認することができました。このような配慮はうれしいですね」（『悲劇喜劇』2023年11月号）と高い評価を受けている。

芸術監督が先頭に立って独創的・先導的な取り組みを続けていることが劇場の確固とした指針となっており、それが劇場全体への高い評価に結びついていると思われる。

自己評価

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

本年度も主催事業について様々なメディアで取り上げられ、それぞれ高い評価をいただいた。

『ある馬の物語』(1)については「アイデアが豊富な白井晃の上演台本・演出と主演・成河の人並み外れた表現力、共演者・スタッフそれぞれの職人技が結集し、多様な魅力が詰まった好舞台になった・・・『これぞ生の演劇』という醍醐味を堪能した」（読売新聞夕刊、2023年6月27日）、「音楽監督・国広和毅の創意が物語と有機的に絡まり合い、素晴らしい効果を上げた」（日本経済新聞夕刊、2023年7月7日）と作品の芸術性について高い評価を得た一方、2022年から継続しているウクライナにおける戦争との関わりからの評価も目立った。「アウシュヴィッツ以降、文学の書き方、読み方は一変したと言われるが、ウクライナ戦争にもそれは言えるので

はないか。さまざまな古典の読み直し、語り直しが生まれるに違いない。『ある馬の物語』も・・・その最良の一例だと思った」（山梨日日新聞、2023年7月15日）、「さまざまに『今』を問うた舞台だった」（毎日新聞夕刊2023年12月20日）などの評は、ロシアの作品の上演に疑問を呈する声もある中で、この上演の意義を信じて制作した当劇場の姿勢をも評価いただいたものと受け止めている。

前川知大演出の『無駄な抵抗』(6)については、「前川知大の新作は、割り切れない今の世界をかきむしる。・・・理不尽にどう対峙するか、考え続けるしかない」（毎日新聞2023年11月16日夕刊）、「『オイディプス王』を変奏した設定が巧みに織り込まれ、少しずつ真相が明かされてゆく塩梅が絶妙だ」（『テアトロ』2024年1月号）、「一人として無駄なキャラクターがないだけでなく、無駄な台詞もない」（『悲劇喜劇』2024年3月号）と作品としての完成度の高さを評価する劇評が出た。さらに、本作は第31回読売演劇大賞で最優秀女優賞、優秀演出家賞、優秀スタッフ賞を受賞するなど、高い評価をいただいている。本年度の同賞では公共劇場が制作した作品の受賞が非常に少なかった中で、特筆すべき成果であると思われる。

作・横山拓也と演出・瀬戸山美咲という新鮮な顔合わせとなった『う蝕』(7)については、「作と演出がこれほど溶けあうようにマッチしている作品も珍しいなと思いながら観ました。・・・横山拓也さんのこういった書き口は初めて拝見しました。・・・新たな側面を見られた気がします」（『悲劇喜劇』2024年5月号）「横山拓也は面白い作家であるにも関わらず、とかく世界が狭く日常的であり、瀬戸山美咲もまた狭い世界からなかなか抜け出ることが出来なかった。ところが今度は二人の共同作業というか、共作効果というか、互いに刺激し合っで・・・飛躍した」（『テアトロ』2024年5月号）と、当劇場ならではの企画で実現した共同作業が、将来の日本演劇界を担うであろう二人のアーティストの可能性を大きく広げたことが評価された。劇場とアーティストとの創造的な関係、劇場による人材育成の新たな可能性として、大きな示唆を持つ事業となった。

「シアター ترام・ネクストジェネレーション」(9)は、本年度から「フィジカル」部門と「ドラマ」部門の二部門制とし、毎年交互に公募する形式とした。「フィジカル」部門の第1回として選出し、上演した女屋理音振付の『pupa』は「さなぎにはじまる成長譚という縦糸、観客の視線や呼吸を引き込んでいく横軸、タメと解放を繰り返す振付など、本人も言及しているピナ・バウシュの跡を襲う、あらたなダンスシアターが新進によって生まれた」（『ダンスマガジン』2024年3月号）という極めて高い評価を受けた。二部門制を導入して身体表現に特化した募集をおこなったことで、従来とは異なるアーティストからの応募が増えており、新制度の成果がさっそく現れたものと理解している。

また、海外招聘公演では、インバル・ピント『リビングルーム』(2)について多くの劇評が出た。「パンデミック後の我々に、あらためて問いかけるような作品だった」（『ダンスマガジン』2023年8月号）、「その不可思議な世界は、強烈な印象を残すというよりも、見終わったあとにあれはなんであったのかという反芻をもたらすものだった」（テアトロ2023年8月号）などの評からは、作品世界をどう捉えるか、劇評家にとっても大きな挑戦となる上演であったことがうかがえる。

プロジェクトのもう一つの柱である学芸事業について書かれた評においては、「コミュニケーションの本質の大切さを痛いほど感じた。舞台に登場する誰かに観客が自分を重ねることで広がる『共感』は、演劇の一つの力だろう。同時に『私』と『あなた』という異なる立場はそのままに、つながる方法を探す。それを可能にするのもまた、演劇の働きではないか」（朝日夕刊2024年3月28日）との指摘がなされた。劇場法が求める「新しい広場」としての役割を、当劇場が確実に果たしていることを再確認できる評価をいただいたと捉えている。

また、子供を対象としたワークショップでは、外国籍の親が、日本人配偶者との間に生まれた子どもと一緒に参加した事例があったが、「自分にとっての居場所ができたと感じた」という感想が寄せられた。こうした声は、「多様性を巻き込む同心円」として当劇場が機能していることを端的に示すものであると思われる。

(5) 持続性

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

世田谷区では、区の「基本計画」の下、分野別計画である「文化・芸術振興計画」（令和5年度までは「第3期（調整計画）」）に基づき文化振興が図られている。当劇場においても同計画を大きな指針として持続性・一貫性を担保しつつ活動をおこなっている。また、令和6年度から開始される次期計画の策定にも財団として参画しており、令和13年までの8年間の区の文化振興施策に緊密に関与していく体制を整えている。

また、劇場を持続的に管理運営するための指針として、平成29年12月に「世田谷パブリックシアター劇場経営に関する基本方針」、平成30年1月には「公益財団法人せたがや文化財団人材活用計画」を策定した。職員の登用や昇任に関する制度を整備し、財団全体の基幹業務を担う「総合職員」と制作や技術等の専門性の高い業務に従事する「専門職員」（いずれも無期雇用）を配置した。平成30年度からは有期雇用の「契約職員」等の雇用形態から内部登用による専門職員への切り替えを、また平成31年度からは専門職員の「主任」の職階への昇任を実施している。令和5年度においては、新たに専門職員に2名が登用され、長期的な視野に立った人材の育成と活用が着実に進んでいる。

また、「創造性」でも取り上げた通り、創造的な作業の基礎となる心理的安全性を担保するため、ハラスメント対策に積極的に取り組んでおり、職員が安心して働ける環境の創出と維持に全力を上げて取り組んでいる。

他の公共劇場や関連団体との連携強化にも力を注いでいる。当劇場で企画制作した作品のツアー公演を全国各地の公共劇場において実施し、成果の共有を図るとともに、全国公立文化施設協会や劇場、音楽堂等連絡協議会に当劇場職員が参画し、公共劇場間の情報共有や連携促進に積極的に取り組んでいる。さらに、コロナ禍を契機として設立された緊急事態舞台芸術ネットワークの事務局にも当劇場スタッフが参画し、公共劇場だけでなく民間団体とも連携してアフターコロナの時代に向けた環境整備に取り組んでいる。

さらに、海外招聘公演の本格的な再開に向けて独立行政法人国際交流基金を始めとする関連機関、在京の各国大使館や文化機関、海外のカンパニー、劇場、フェスティバル等との連携を加速させており、将来に渡って国際交流事業を持続的に実施するための基盤を整えている。

持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

世田谷区の外郭団体行動計画に従ってPDCAサイクルを機能させるべく、事業の計画時及び実施後に文化生活情報センター幹部会において検討・評価を行う体制を確立している。さらに、「人材活用計画」を基に、職員を適切に処遇することでモチベーションの向上と人材育成を図っており、持続的に事業を展開することでアウトカムの発現・定着に向けた組織体制の強化に取り組んでいる。

また、事業実施体制の持続性を確保するため、「世田谷パブリックシアター友の会」「せたがやアーツカード会員」「U24」といった会員組織および会員制度を劇場運営の基盤とするとともに、時代に合わせたサービスの見直し・導入を検討することで、観客の裾野を広げ、観客の新規開拓を図っている。

「世田谷パブリックシアターを開かれた劇場にする」という白井芸術監督の明確なポリシーのもと、劇場を訪れる人々がそれぞれの「居場所」を見つけることができる多彩な事業を展開することで、アウトカムを持続的に発現・定着させるための強固な基盤の構築が進みつつあると考えている。